



敵討裏見葛葉

五

五七

~ 13
3102
5止



空喜 羽 村忠

敵討裏見葛葉卷之五

曲亭馬琴戲編

月八

一 條反橋小道満識神を走らんと并ニ童子
續命の法を後とする事

さても保名の葛の葉母子小童よりを委ねた仇人小の
漏れ入るを憚りてと勤平ともるつとと詰朝只ひとり信太
をうちちと洛小起死加茂保憲の嫡男光栄の家小到りて又
保明がの信太庄司と茅十枝九が横死のりかうへまむもあちも
あく演説しとく白楓が告ぐるの木末若屋道満の男と茅が

仇人ある石川悪右衛門といひ、その千晴が殘黨近江大島逸
澄ある、且帝の腦の祈小の調伏、とてまのらんとするの
を、濶小訴、すゝ、が、光榮、ち、保名、が、忠考、と、感激、の
あまり、亡父保憲、も、保明、が、死後の、勘當、を、免、と、い
ふ、道満、が、悪慮、を、輕、小、の、う、ざ、れ、と、い、ま、い、せ、る、證據、を、け
し、の、卒、尔、も、披、家、と、ん、も、又、仇、を、報、つ、る、も、あ、一、易、く、と、い、は
且、後、宿、小、退、れ、と、音、耗、を、ま、つ、べ、と、仰、せ、保、名、の、ふ
く、控、び、て、その、夜、光、榮、の、家、より、と、歸、ると、二、條、反、橋、ま、と、來
り、と、い、ひ、も、け、と、殿、の、癖、者、橋、の、左、右、より、と、挾、む、力

昭和九年
七月二三日
購求

以、抜、つ、と、切、て、つ、れ、保、名、も、抜、の、せ、と、切、結、と、寡、の、衆、小、敵
一、と、既、小、數、箇、所、の、深、瘡、を、負、く、尻、居、小、挫、と、倒、る、と、い、ふ、今、ま、を
あ、つ、る、癖、者、の、跡、を、消、す、と、四、方、髪、を、大、男、と、一、人、の
奴、隸、の、小、血、の、志、と、太、刀、引、提、ぐ、保、名、が、備、小、と、い、り、り
その、瘡、小、苦、む、を、と、く、彼、大、男、と、と、お、笑、ひ、い、保、名
が、男、の、仇、人、と、を、索、ね、る、石、川、悪、右、衛、門、入、道、と、道、満、と、い
ふ、と、い、ふ、と、い、は、れ、を、討、ん、な、今、宵、加、茂、光、榮、が、家、小、倒、し、の、以
て、合、せ、と、い、う、り、あ、る、と、い、ふ、昔、の、の、の、の、と、い、ふ、れ、甲、夜
より、此、と、い、う、も、い、は、れ、を、も、ら、茶、祇、尼、天、の、法、術、と、い、ふ、殿、の、癖

其書無卷五



葛葉巻五

悪右衛門入道
道満八術
わんくあまの
癖者保名と
そつ困る係
んを斬く保
名と反撃し





道満奴隸
殿平小保名が死
を埋めくさせし
保憲が封じられたる撒神と
いふ

者敵當如くもんとて輒反撃せしむ。後の患を除くのあり。
いふ小僧もとも今なきやうなふべうとて成佛せしむと欺ハ保名
やく齒を切りさして仇人悪友集つてあつるも人々皆驚
愕く。秘書を汝がひ小僧もその法術小僧も解せしむひ
あくもをわくと解せしむと朽きしむと數箇処の瘻をけ
らうとも一太刀さきさぐちとひたせしむ。刀を杖小立あがり。あう
めたぐ打てかきぶくの潜りて撲地と蹴倒し。忽地足下小楚
と踏居胸のちかく刺さる。鮮血あがきく泉のどく。保名を
決小息絶たり。道満ハ莞々として血刀中拭ひつ。鞘小僧あ

保名が懐きとの探りて。彼玉をも棄ひらう。奴隷辰平が耳小口を
よせく。この死骸人のきぬ隙小くしてひび辰平とををぬて
かぐ川中へ投入せんとするを。道満とややく。路ハ海遠く。
今又川も涸る時あり。縦川へ押あがきしむ。後安しとよる
小足も彼処をぬく。掘穿く埋りんと下知もむ。辰平黙頭て
左右をえり。橋の石より小一皮小高処あるを。是究竟くと
く。とらく。掘ると四五尺小及び。と死土中小物の碎る音。
二道の金光忽ちと内だ昇り。中天も消うせ。辰平ハ更々
道満ハこの光景をえり。怪しむ。袖の裏小窺つ。方小驚はく

いふやうに今土中より走らざるもの識神ありん。ひびく加茂保憲
識神を使役しく天地の時変あつらふとあり。されどもこの
器量あはれれ小を侍るとは私慾ありて人小禍をんるを
怖れ終小との思その人小も侍りて後一とあつらふがその保
憲との処小識神を封じておとせんとあがり。これを成暁らざりて
徒小走らざりてを女らね彼識神小あるとゆふられいふに
その人の右小おの朽をしく後悔をせざるもつとせざるべし。
辰平も縁故をばしていと遺憾あり。まがりの定をさし覗又蒼天
をうちあがりあはれどもあつらひゆらむね辛く保名

屍を埋せり。舊の如く小土をうたへしと主従をさきまかり。この
時泉列信太の葛葉母子童子をさく慈をりつと保名が
音耗をさるる。あはれりてあはれぬ。今朝も子幼平を養ふと
浴へのぼり。母子とのあはれをいひ出さく。互うさうあはれりる。あ
しも童子のあはれをいひ出さく。ひとり遊び居たりる。俄頃風颯と
あつらまら。童子と撲地と吹倒れ。あはれ葛葉葉慌忙と
走り出さく抱え入る。頓小昏絶るあり。経よりいひて教
悲しく茶よ鍼よとささる。隙小童子へあはれ魁生く。左右を
えらうつと身を起し。世母さよ母れもあはれ。れ今加茂保憲

と父が未然を察せしとて露をたがひたるも天あり命をわれし層の道
のこを傳受く。餘の術のうせむさうぶ。汝續命の法をたしとて。その
夜腹心の家諱をねく。童子もとてに反橋小到せ。童子の父が埋
られる如小千の通夜法を被し。曉るるびくとの屍を掘出さるるに
保名、忽然と蘇生く。切れる太刀の痕、ふええと。是夢の
覚るる持せり。かき伴ひつり。光榮まづ縁由を審小説示せば
保名、天小訪ひ比子喜ひ。光榮の深江惠と童子が道子長たるを
感激し。こまぶり。光榮その日、摂政實頼公まわりて。信太
庄司、保明がのを初とて。保名童子の信太の白紙たるまを

も首尾を演説し。さしやまや。芦屋道満、田原千晴が。政黨も。近江
太郎逸澄と。そのの。彼姓名を石川悪右衛門と。変て。矢田部定邦小
冠せんと。謀と。た。ま。の。の。ありと。子枝丸が。横丸庄司が。殺めれし
る。成も。げ。え。と。ま。つ。り。彼。今。御。愼。れ。祈。ふ。る。の。せ。く。朝。家。を。傾。奉。
らんと謀る。保名が。子。童。子。が。訴。る。不。と。彼。童。子。の。あ。り。知。虫。と。し
ども識神を使役し。道満が。小。討。せ。る。の。を。蘇。生。あ。し。せ。る
後のりれあり。畏れれ。帝の御物怪をも。輒く。禳。ま。し。んと。す。ち。れ
は。ま。づ。試。よ。の。の。を。行。さ。せ。ぬ。御。物。怪。頓。に。除。ら。ん。と。公。私。の。幸
の。う。た。め。の。べ。く。の。功。を。の。つ。く。被。ホ。又。子。小。道。満。を。殺。せ。て。そ



をりつて
のれきり
光栄保名
この席に
藤清あり
行はる

葛葉巻五



安倍童子
道満を隠謀
あつて道
満既小生
狗とねん
隠の術

後流る保明が孫七歳の童子あり。彼も物怪を懐きんと清く
彼の保憲が高弟なり。信太庄司晴俊が為も外孫ありと云ふ事
らべ人小過する所ありん。女冬年の長女ももろむと道小園なる
りく勝せりとまきへ道満と童子が術を試んお小百のせりとの
る諸郷をまきへべと答めお浩如小二人の童扈従一ツの箱を
扛りくせり。實頼公これを道満童子小示り。箱の裡ある物を
螢ひと仰もゆぬ。小道満との声小應り。冬瓦と土器ありと云ふ童
子の土器と蛇ありと云ふ事。まきりち蓋を開くふちある冬瓦と土器と
ゆり。清方えく冷笑ひ童子が並たふり。黄口の孺子らも

冬瓦と土器と蛇ありと云ふ事。まきりち蓋を開くふちある冬瓦と土器と
ゆり。清方えく冷笑ひ童子が並たふり。黄口の孺子らも
る諸郷をまきへべと答めお浩如小二人の童扈従一ツの箱を
扛りくせり。實頼公これを道満童子小示り。箱の裡ある物を
螢ひと仰もゆぬ。小道満との声小應り。冬瓦と土器ありと云ふ童
子の土器と蛇ありと云ふ事。まきりち蓋を開くふちある冬瓦と土器と
ゆり。清方えく冷笑ひ童子が並たふり。黄口の孺子らも
る諸郷をまきへべと答めお浩如小二人の童扈従一ツの箱を
扛りくせり。實頼公これを道満童子小示り。箱の裡ある物を
螢ひと仰もゆぬ。小道満との声小應り。冬瓦と土器ありと云ふ童
子の土器と蛇ありと云ふ事。まきりち蓋を開くふちある冬瓦と土器と
ゆり。清方えく冷笑ひ童子が並たふり。黄口の孺子らも

小賜こまきする宗むねあり。彼かれ劍けん千晴ちかてるが又また秀郷ひでさとが龍宮りゆうきゆうより召よるものある
よる武徳ぶとくもあは定邦じやうぱうが小落こらくの彼人かれひと忽たち狂人きやうじんとあり。さ
まの禍わざはひを隠かくせり。畏おそれどその以も過上かみり入い小係こけいをたすか
當今いま隠かく久くく御怒ごどのせぬをこそ。彼劍かれけんを秀郷ひでさとが本國ほんくに
下野しもの小遣こぢ一社いつしやの神かみ小多こたの御怒ごど立た地ぢ小多こたとあるを
トス實頼じつらん公こう食く眉まゆを頻ひんぬ彼劍かれけん過かつ。年とし悪右あくさうとある
のが泣な去さする。定邦じやうぱう訴うせりあり。今いまこれを召よるを
まとも輒ただく告つげると宣のたまひ童子どうじ又またヤスオの劍けん外ほかを求め
小及こおよと今日けふ召よる道満みちみ小仰こおほせと告つげぬ。彼かれ石川いしかわ悪右あくさうと

ひとら定邦じやうぱう小仕こしの家城いけと謀まを童子どうじが外祖げいそ信田しんた
庄司せうじ小曉こせうられ。當今いま小庄司こせうじを切害きがいと矢田部やたべを生奔なまはし。和泉路わいせんろ小
く不意ふいも童どうまが父ちち保名やねが秘書ひしょどもを召よる。播磨はりま小逃こにげと
陰陽師いんやうしとあり。更さら小若屋わがや道満みちみと名告なをする。彼の今いまあり
小陰陽いんやうの道みちを説とくも金鳥きんとり玉たま鬼おに篋けつ内うち傳でん茶ちや紙し天てんの法書ほふしょ小ある
の。件けんの劍けんの彼かれ懐か小こと。さく。百ひゃくと。い。せ。も。の。む。ど。
道満みちみの童子どうじを自眼みづまを。を。と。孩こ兒ご物ものを狂くる行ゆを。く。と。ま。を。石
川いしかわ悪右あくさうとあり。さ。い。ひ。も。さ。う。さ。う。小保名よね席せき下したの。り。つ。と。ま。の。
と。い。ふ。道満みちみは。反橋はんはしも。く。れ。を。ぬ。り。軽かろと。た。ら。う。石川いしかわ悪右あくさう



其葉巻五



保名童子反橋にて
 仇人道満と戦はる
 与勘平道満が
 奴隸段平を斬り
 其葛葛の
 おりいとの
 外へ来りし
 光景とて
 大よらる

方と嚴く縛め羊と道満が往方以素人としてまゝにを童子に
く押さぬ彼道満小の術以得く脱と去るともこれ又とを縛
これに只打捨てぬたぬとも洛中を歩るあつた且この討は仇人
小譲るべしお母えと只今仇討の行を彼らに頼く道満を討とら
彼剣をも進せんことをねがひたれとせし實頼公あつた感
者。かく復讐の免許ありと刺二口の太刀以保名童子小賜れ
父子小歎ひく既小退せんとするた光榮保名童子小討く彼道満
も茶祇尼天の法術をひられ等閑の敵小あつた漫ろく過せと
ころつられ童子にけぬり彼法入を征するの事小已に防らる

わつらとわつらと外祖信太庄司も茶祇尼天の法を修する時
彼のあつた小好むをいれぬとらあつた今小討とら剣をた復
せしとむも中むも男へさしむくま物なり。かく道満の術をひく
必死脱と三部の秘書をも携う一篠反橋さうさう小つた
る路あれと只とまひくある。蒼きぬつとらつ時をさる。
浩処小保名童子のめがまぐお扮く前後より一杖とら小道満
あつた網の裏に潔く名告めひく。勝負を決せよとゆれど道満は
回答もあつた。お母脱と走らせるとする小の術はとらふと連忙
が信とらひく。と冷笑ひこれ逸澄とゆれ。昔より敵

受く後れをとうと況は又子のとたのれく百人むらとも屑ともか
とべたり是知せよとれたまはれと太刀成内りて援放せぬ保名父子荒介
らと天下のおも朝敵あり又まがなる家の仇の漏らとておこ
る道満とを物ともせと志ど挑と戦ふれも道満が奴隸は
平素後れくやとの処走り来つ竊小保名が後まのり声取も
うけと破るともると死と勘平も又主を慕うと来とらうがかくと
そと跳くる抜ゆも又そと返平が首をうと打せと道満とれ小
ころぬる力と引て脱んとするを初太刀の保名二の太刀の童子が小
腕小切とや。首の死切とまのぶと勘平のめたとく。それぐ

今朝光采の川亭に到着しとれ又子のうを審小父志の撰政殿よ
りうのあふを初る小仇人道満を討とらん為小直小反橋と走むひ
あふよを告るはれあふとく。ゆめとあふと走來れりと語もあ
ねおとをゆと真葛葛の孫の童子を追鬼つとありともとて
洛上の以今とめひあひと眼前との光景をう又縁由をゆと
終るの更小はれとむわとてうけて保名の自執の宝珠と三部の秘書
ともう復し道満が首と宝剣とを携と撰政殿へあり審小仇を
斬るる為体をゆえなれは實頼公まんと賞美ありと道満
が首級へ使廳とこれと六條河原集りたる。又藤清右

と厳しく糾明し謀反の餘類を穿鑿せしむるも全く道満
の十晴が孫黨あると云ふも其の術藝の巧みたるを以て
擧げしむるを陳はたふとも罪科終小脱せしめて遠國小配
流せしめしが年を強く勅免ありしと云ふは實頼公の悪を
入道道満誅伏の由且秀郷が宝劍の縁故を矢田部定邦に仰らば
俄頃小勅使を下野に送られし彼劍を一社の神小宮の御よりを
命らる今の誹来矢権現と云ふありしと云ふは小勅使の宝劍を携
え洛を立ち上ける日より帝の御怒地小平愈まりしことを不思
議なるとして小又矢田部定邦の年来重病小おされ生死不定小く

ありしと云ふ保名又子の白狐のゆゑも一五二十をばけしむる先
非を悔ゆひ保名小彼をを受楠本の社を再建しこれを納め又
千枝九がね小正寛庵は一字の堂舎を建立しと云ふは追善を
終へる功德小やしく後りあり病本復せりされば楠本の神社の東
まゝ小又驗掲焉貴賤を運ぶりのあると云ふはの神社の東
小信太明神とせしめりしと云ふは素盞盛鳥尊ありとも又大歳神伊怒
姫を娶ふ生あひつる大山作をなむしと云ふはの両社との間遠ら
らされば楠本の神を信太明神とらひのあまのりしむるや世小保
名がる心使する草紙小おぼく信太の神の又驗を稱せりといふ

